様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８７０９２９

研究課題名（和文）民国期上海における映画の社会的役割に関する総合研究―「通俗」から「政治」への過程

研究課題名（英文）Transition of the Social Uses of Cinema in Republican Shanghai: From Vulgar Entertainment to a Political Tool

研究代表者
菅原　慶乃（Sugawara, Yoshino）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：３０４１１４９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、上海への伝来後しばらくの間通俗的な娯楽であるとされていた映画が、1930年代には教育・政治宣伝の工具として注目されるに至った過程を対象とした。具体的には、映画伝来以降概ね40年の間に、映画上映環境と映画観賞習慣がどのように変遷したかについて着目し、上海YMCAなどによる非商業上映の影響、映画と隣接文芸ジャンルの交渉、映画産業と社会思潮との連動の３点が重要な役割を果たしたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study explores the transition of the various uses of cinema in Shanghai. Targeting the period from the late nineteenth century to the mid-forties in the twentieth century, this study mainly focuses on the transition in terms of the movie-exhibition environment and movie-going culture. This study concludes that the transition was primarily driven by non-theatrical cinema exhibitions arranged by educational organizations such as the Shanghai YMCA, which was associated with the modernization of the novel and drama, and was joined by several capitalist-nationalist film company owners, film makers, and journalists.

研究分野：中国語圏映画史

キーワード：幻灯　上海YMCA　観劇文化　映画観賞　映画館　映画統制　説明書　ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

19 世紀末の伝来以来、映画は主に茶園を中心とした遊楽場における見せ物興行の演目の一つとして受容されてきた。1910 年代初頭に遊楽場等における映画常設興行が定着すると、映画は、阿片吸引や妓女、犯罪、さまざまな不道徳行為といった猥雑さや通俗性と常に隣り合わせの娯楽として認識されるようになる。こうしたイメージは、「魔都」上海の一つのシンボルとして国内外に広く流通していた。他方で、映画は特に 1930 年代には教育や政治宣伝工具として極めて重要な役割を果たしてきたことも良く知られる史実である。中国における映画と教育との結びつきは商務印書館影片部の設立期（1917 年）まで遡及されることもあるが、本格的な動きは 1930 年代の教育電影委員会の活動に求められるのが一般的である。

近年、南京政府設立後の国民党の教育映画制作やプロパガンダ映画制作にかんする研究が隆盛し、豊かな研究成果が蓄積されつつある。しかしながら、上海において、映画が、通俗的な娯楽の範疇を越え、教育・政治宣伝工具としての地位を確立するまでの過程には不明な点が多く残されている。従来の映画史研究は映画興行の産業史的側面に対する関心は高くはなく、加えて非商業上映や映画の教育目的の利用をほとんど考慮してこなかった。さらには、映画と密接な関係を持っていた見世物興行や演劇、通俗文学といった隣接する文芸領域と映画との関係も十分に重視してきたとはいえない。このような研究上の偏りもまた、民国期上海における映画の社会的位置づけの解明の障害となってきたと考える。

２．研究の目的

本研究は映画到来後しばらくの間通俗性の極みとされた映画、とりわけ映画上映空間や映画観賞習慣が、社会的信頼を勝ち取り、教育・政治宣伝の工具として注目されるに至った過程を明らかにすることを目的として遂行した。

本研究の目的を達成するためには従来行われてきた映画興行史の研究的蓄積の上に、幅広い映画受容のミリューを射程に入れ、民国期上海において映画の社会的役割が辿ってきた重層的な変遷の軌跡を描くことが求められる。

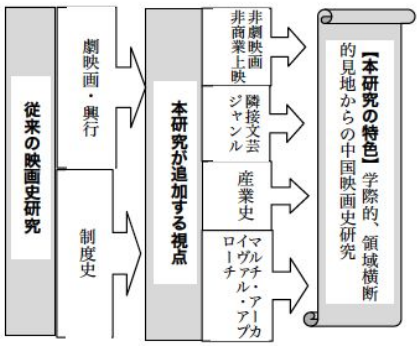
このため、本研究では映画伝来直後から概ね 1940 年代前半までの上海における映画上映について、興行と非商業上映、劇映画と教育映画、さらには映画と幻灯・通俗小説といった領域を横断しながら、上海における視覚メディア文化史の総体的な文脈における映画の位置づけを詳らかにした。

３．研究の方法

如上の問題意識をもとに、映画伝来以降概ね 40 年の間に映画上映環境と映画観賞習慣がどのように変遷したかを主な着眼点として、（１）非劇映画・非商業上映の諸相、（２）映画と隣接文芸ジャンルとの交渉、（３）映画産業と社会思潮との関連、の 3 点からアプローチした。

研究の柱は、上記 3 点にかんする言説分析である。雑誌・新聞記事、書籍、パンフレット、公文書など多岐にわたる文字資料について、中国国内所蔵の資料のみならず関連諸国の図書館、資料館などが所蔵する一次資料にも目を向けるマルチ・アーカイヴァルな観点から渉猟し、分析を行った（図１を参照）。

【図１】　本研究の概要の概念図



資料分析にさいして、特に注目した文献は次の通りである。

（１）映画の非劇場上映の諸相
・上海 YMCA 機関誌『上海青年』
・カウツ・ファミリーYMCA アーカイブズ（ミネソタ大学）所蔵の上海 YMCA 関連文書
・『申報』掲載の映画上映広告と関連記事
・『点石斎画報』・『図画日報』などの絵入り新聞掲載の関連記事
・『格致彙編』・『格致新報』などの科学雑誌

（２）映画に隣接文芸ジャンルとの交渉
・『申報』・『新聞報』・『遊戯報』、*North China Daily News*、*Shanghai Times* などの新聞に掲載された映画上映広告および関連記事
・清末民初にかけて執筆された観劇関連日記（『鄭孝胥日記』など）
・『解放画報』・『春声』・『影戯雑誌』などの文芸雑誌
・清末民初に執筆された伝統劇の観劇日記（『鄭孝胥日記』・『京劇歴史文献滙編』及び『清代日記彙抄』所収文献のうち関連するもの）、映画産業従事者による日記（『陸潔日記』・『陸澹安日記』など）

（３）映画産業と社会思潮との関連
・アメリカ国立公文書記録保管局所蔵の駐上海アメリカ領事館が作成した以下に関連する文書：中国の映画市場レポート類、同領事館に会社登記した外国籍映画館会社の登記関連資料、『危険大歓迎』上映問題及び『大

地』を始めとする米国映画会社の中国での映画撮影に関する文書
・『申報』・『電声』などの新聞に掲載された関連記事
・日中戦争開戦以降に日本で発行された映画雑誌における中国映画関連記事
・『銀星』・『影戯生活』・
・「旧上海」回想録（鄭逸梅・徐半梅・その他）

４．研究成果

本研究では前述の 3 点についてそれぞれ次のような成果を得た。

（１） 映画の非劇場上映の諸相

・映画の受容経路の重層性と知的遊戯としての映画

清末の上海に映画が伝来した際、それは多重的な意味合いを帯びていた。映画観賞は同時期に流行した西洋奇術や X 線身体透過芸と同様最先端の科学技術であり、西洋の新しい知識を伝播するメディアとしても受け入れられた。それゆえに、映画は観劇のように見て楽しむ娯楽のみならず、その科学的仕組みを理解することそのものを愉悦とする娯楽でもあった。上海における映画受容の最も大きな特徴である「理解する」娯楽としての観賞美学は、後に上海における映画観賞に不可欠の文字メディアである映画小説や映画の説明書」という形態へと変容していった。

・上海 YMCA による幻灯・映画の非商業上映活動

上海 YMCA は 1910 年代の初頭より映画の定期上映会を開催しており、市井の映画上映とは全く異なる秩序、すなわち静座・静謐を是とする「健全」な映画観賞を確立した。特に重要なのは、上海 YMCA には後に映画界で活躍することとなる少なくない重要な映画人たちが参加していた点だ。例えば商務印書館影片部設立を牽引した鮑慶甲、北京大戯院や南京大戯院といった上海の代表的な映画館を有していた何挺然、初期中国映画の最重要人物の一人陸潔などはいずれも上海 YMCA と密接に関わっており、後年かれらが各々の立場から映画産業に携わる際、上海 YMCA が唱えていた「健全」な映画にかんするモットーを明らかに援用したものだった。

（２）映画に隣接文芸ジャンルとの交渉

知的遊戯として受容された映画は、他方において伝統劇の観劇文化の文脈にも包摂され、近代上海の娯楽文化に包摂された。上海では、人々は伝統劇の観劇前後に庭園や茶園を訪れ時間を過ごすことを習慣化していた。町をそぞろ歩き、すなわち遊歩を通じて「動く仮想のまなざし」（アン・フリードバーグ）でもって近代都市のさまざまな刺激を感覚摘に享受することは、近代都市上海の新たな娯楽となった。映画受容はこのような観劇習慣を基礎とする遊歩文化においても受容・定着していった。19 世紀末以降の上海の商業劇場では、演目が細分化され、様々な劇種が併演される傾向が見られるようになったが、演目の多様化が進むにつれ、幻灯や奇術、その他の見世物芸、そして映画が取り込まれるに到った。多様な演目を集成するという初期の映画上映プログラムのこのような雑種性の痕跡は、1920 年代に国産映画が作られるようになると、フィルムに内在するに到った。初期の中国映画、特に『閻瑞生』や『労工之愛情』には、映画のロケーション撮影を通じて観客の観劇・映画観賞にとって不可欠な「遊歩」習慣が再現されたものや、作品中に複数の演目の集成を彷彿とさせるような複数の主題が重層的に組み込まれるなどの事例を確認した。

20 世紀に入ると、映画は演説や新劇と同様、市立中学などの学生たちに大いに受け入れられるようになった。とりわけ上海において五四新文化運動に共鳴して結成された上海学生聯合会は、江蘇省教育会、上海 YMCA の付設学校などの教育関係機関と連動しながら活発な演説活動を繰り広げたが、この活動において任矜蘋らが新劇関係者と密接な人脈を築き、1922 年に明星影片公司の誕生への道筋が整えられた。1920 年代初頭に映画が社会的に悪影響を及ぼすとの世論が高まると、任矜蘋らは人脈を駆使して江蘇省教育会電影審閲委員会と連動し、明星影片公司の映画が社会改良や社会教育に資する教育的性格を持つことを強くアピールした。

他方、顧肯夫、陸潔らもまた数々の文芸雑誌を興し、映画の社会教育上の有用性を謳った。また、外国映画の粗筋を「電影小説」、「説明書」という新たな文芸スタイルへと翻案し、各種雑誌・「小報」などに掲載した。映画の受容が、当時隆盛していたいわゆる「鴛鴦蝴蝶派」的文体の通俗文学調の小説に仕立てたこれらの文芸スタイルは、上海における映画受容のもう一つの重要な経路となった。

（３）映画産業と社会思潮との関連

中国において映画が 1930 年代に政治化していった背景として、国民党政府が映画統制にかんする法令を急速に整備したことが大きな要因として認められる。その発端となったのが 1929 年 2 月に大光明大戯院で上映された『危険大歓迎』をめぐる大規模抗議活動である。本研究ではこの『危険大歓迎事件』の展開について、中国の新聞・雑誌に掲載された抗議活動をめぐる言説と、駐上海アメリカ領事館の動きの双方を詳細に追うことで、この抗議活動が限りなく中国の「公」的な側面があり、中国におけるナショナリズムを極めて象徴的に反映している事を明らかにした。

また、1930 年代以降上海の著名な映画館会社がアメリカの中国貿易法などに乗っ取って陸続と「アメリカ籍」会社として登記し企

業活動を行っていた点にも着目した。このような映画館会社は実質的には中国人によって経営されていたが、当時のジャーナリズムにおいてはこのような会社がアメリカによる文化的経済的帝国主義に加担するものとして批判していた。本研究では、上海における映画配給・興行会社の団体と駐上海アメリカ領事館とのさまざまな交渉の一つ一つを、主にアメリカ側公文書を丹念に読み解きながら分析した。その結果、外国籍映画館会社が実際に担った役割は帝国主義勢力への加担というよりも、むしろ当時の上海の映画市場を席巻していたアメリカ映画の市場を制御することで、中国産映画の市場を確実に獲得することに重きが置かれていたこと、さらに日中戦争開戦以降の時期には、日本政府による映画市場統制から上海映画市場をある程度まで「防衛」する役割を担っていたことが明らかとなった。

第３点として、上海においてさまざまな形で「近代」文化としてのユニバーサルな映画文化を定着させようとする動きに着目した。本研究では、映画観賞マナーの確立や、暴力描写・ポルノグラフィーの統制をめぐる言説を渉猟し分析した結果、上海の映画産業従事者や映画ジャーナリズムが、「近代」的な映画文化の確立によって社会改良を目指すと同時に、映画をナショナリズム高揚の重要な手段として位置づけようとしていた過程を明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７件）
①菅原慶乃、「理解する」娯楽―映画説明成立史考、日本中国学会報、査読有、68、2016、182-196

②菅原慶乃、闇のなかの知的なささやき―肉声による映画説明、関西大学中国文学会紀要、査読無、37、2016、349-366

③Yoshino Sugawara、Beyond the Boundary between China and the West: Changing Identities of Foreign-registered Film Theatre Companies and Film Theatre Culture in Republican Shanghai、*Journal of Chinese Cinemas*、査読有、9(1)、2015、23-41
DOI: http://dx.doi.org/10.1080/17508061.2015.1004232

④菅原慶乃、映画史から忘却された「儒商」、任矜蘋―教育者、愛国者、映画監督、野草、査読有、95、2015、21-50

⑤菅原慶乃、走向「猥雑」的彼岸：「健康娯楽」之電影的誕生与上海基督教青年会、伝播与社会学刊、査読有、29、2014、151-175

⑥ Yoshino Sugawara 、The Flâneur in Shanghai: Moviegoing and Spectatorship in the Late Qing and Early Republican Era、関西大学東西学術研究所紀要、査読有、48、2014、1-28
DOI: http://hdl.handle.net/10112/9281

⑦菅原慶乃、「猥雑」の彼岸へ―「健全なる娯楽」としての映画の誕生と上海 Y.M.C.A.、映像学、査読有、2013、41-56

〔学会発表〕（計　２件）
①Yoshino Sugawara、Birth of Moviegoing: Separation, Succession, and Transformation from Traditional Theatergoing in Shanghai 、2014 Annual Conference of Society of Cinema and Media Studies、2014年3月20日、Sheraton Seattle (USA)

②Yoshino Sugawara、商業主義和民族主義之間：一九三〇年代上海外国籍電影院公司（Video presentation）、Chinese-Language Cinema: Text, Context and History、2013年６月６日、香港浸会大学（Hong Kong）

〔図書〕（計　２件）
①堀潤之・菅原慶乃編著、越境の映画史、関西大学出版部、2014、99-142、261-267

②Yoshino Sugawara, Between Commercialism and Nationalism: Preliminary Study of Foreign-Registered Film Theatre Companies in Shanghai during the 1930s 、Chinese-Language Cinema: Text, Context, and History (Conference Proceedings)、2013、25

〔その他〕
ホームページ等
http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~sugawara/

６．研究組織
(1)研究代表者
菅原　慶乃（SUGAWARA, Yoshino）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：３０４１１４９０